

坪西雄飛著

新編

浮雲

東京金港堂梓

第一篇

坪内雄飛著

新編

浮雲

東京金港堂梓

明治二十年四月九日版權免許
同六月出版

著者

東京府平民

坪内雄藏

東京本郷區眞砂町
十八番地

東京府士族

出版人

原亮三郎

東京日本橋區本町三丁目
拾七番地

大坂心齋橋筋北久寶寺町四丁目

大賣捌所
金港堂原亮三郎支店

賣捌所

岐阜
仙臺金港堂支店

各府縣下代理大賣捌所

新編 浮雲 上篇

春のや主人
二葉亭四迷

合作

第一回 ア、ラ怪しの人の舉動

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日
の午後三時頃に神田見附の内より塗渡る蟻散る蜘蛛
の子とうよくぞよく沸出でゝ來るのは孰れも願
を氣よし給ふ方と、まかし熟く見て篤と點檢すると是
れにも種々種類のもの、まづ髭から書立てれば
口髭頬髭顙の鬚、暴に興起した拿破崙髭に狎の口めい

た比^ひ斯^す馬^ま克^く髭^{ひげ}、そのほか矮^{あや}鷄^け髭^{ひげ}、貉^{むじな}髭^{ひげ}、ありやなしやの幻^{まほう}
 の髭^{ひげ}ど濃^こくも淡^{うす}くもいろ／＼に生^は分^{わか}る髭^{ひげ}に續^{つづ}いて差^さ
 ひのあるのは服飾^{みなり}白^{しろ}木^き屋^や仕^し込^こみの黒^{くろ}物^{いもの}づくめには佛^ふ
 蘭^{らん}西^す皮^{がわ}の靴^{くつ}の配^{ゆう}偶^ぐはありうち、之^{これ}を召^めす方^{かた}様^{さま}の鼻^{はな}毛^げハ
 延^のびて蜻^{せん}蛉^{れい}をも釣^つるべしといふ是^これより降^{くだ}つては背^せ
 皺^{しわ}よると枕^{まくら}詞^{ことば}の付^つく「スコッチ」の背^せ廣^{ひろ}にゴリ／＼する
 ほどの牛^{うし}の毛^け皮^{がわ}靴^{くつ}、うゐで踵^{かかと}にお飾^{かざり}を絶^たえぬ所^{ところ}から泥^{どろ}
 に尾^おを曳^ひく龜^{かめ}甲^{のこ}洋^{やう}袴^{はん}、いづれも釣^{つる}しんぼうの苦^く患^{げん}を今^{いま}
 に脱^{だつ}せぬ貌^{かほ}付^{つき}、デも持^{もち}主^{ぬせ}は得意^{さくい}なもので髭^{ひげ}あり服^きあり
 我^{われ}また奚^{なに}をか覓^{もと}めんと濟^{すま}した顔^{がん}色^{しよく}で火^ひをくれた木^き頭^づ
 と反^{さう}身^みッてお歸^{かへ}り遊^{あそ}ばすイヤお羨^{うらやま}しいおどだ其^{その}後^{あと}よ

り續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭弓と曲
げても張の弱い腰に無殘や空辨當を振垂げてヨダ／＼
ものでお歸りなさるさては老朽しても流石はまた職
に堪へるものかあゝし日本服でも勤められるお手輕
なお身の上さりとばまたお氣の毒な
途上人影の稀れに成つた頃同じ見附の内より兩人の
少年が話しながら出て參つた一人は年齢二十二三の
男顔色は蒼味七分に土氣三分どうも宜敷ないが秀た
眉に儼然とした眼付でズーと押徹つた鼻筋唯惜哉口
元が些と尋常でないばかり、しかし締はよささうゆゑ
繪草紙屋の前に立つてもバックリ開くなどゝいふ氣

遣ひへ有るまいか兎に角頤が尖つて頬骨が露れ非道く癩れてゐる故か顔の造作がどげくしてゐて愛嬌氣といつたら微塵もなし醜くはないが何處ともなくケンがある背はスラリとしてゐるばかりで左而已高いといふ程でもないが疲肉ゆゑ半鐘なんどやらといふ人聞の悪い渾名に縁が有りさうで、年數物ながら摺疊皺の存じた霜降スコッチの服を身よ纏ッて組紐を盤帶にした帽檐廣な黒羅紗の帽子を戴いてゐ、今一人は前の男より二ツ三ツ兄らしく中肉中背で色白の丸顔口元の尋常な所から眼付のバツチリとした所は仲々の好男子ながら顔立がひねてゐせくしてゐるの

で何となく品格のない男黒羅紗の半「フロックコート」
に同じ色の「チヨッキ」洋袴へ何か乙な縞羅紗でリウド
した衣裳附縁の巻上った釜底形の黒の帽子を眉深に
冠り左の手を隠袋へ差入れ右の手で細々とした杖を
玩物にしながら高い男に向ひ

「しかし子一若し果して課長が我輩を信用してゐる
なら蓋し已むを得ざるに出でたんだ何故と言ッて
見給へ局員四十有餘名と言やア大層のやうだけれ
ども皆腰の曲つた老爺よ非ざれば氣の利かない奴
ばかりだらう其内でかう言やア可笑しい様だけれ
ども若手でサ原書も些たア嚙つてゐてサ而して事

務を取らせて捗の往く者と言つたらマア我輩二三
人だ、だから若し果して信用してゐるのなら已を得
ないのサ

「けれども山口を見給へ事務を取らせたら彼の男程
捗の往く者はあるまいけれども矢張免を喰つたち
やアないか

「彼奴はいかん彼奴は馬鹿だからいかん

「何故

「何故と言つて彼奴は馬鹿だ課長に向つて此間のや

うな事を言ふ所を見りやア彌馬鹿だ

「あれは全體課長が悪ハサ自分が不條理な事を言つ

けながら何にもあんなに頭でなしにいふこともない

「それは課長の方が或は不條理かも知れぬがしかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞといふなア馬鹿の骨頂だまづ考へて見給へ山口は何んだ屬吏ぢやアないか屬吏ならば假令ひ課長の言付を條理と思つたにしろ思はぬにしろハイ／＼言つて其通り處辨して往きやア職分は盡きてるぢやアないか然るに彼奴のやうに苟も課長たる者に向つてあんな差圖がましい事を……」

「イヤあれは指圖ぢやアない。注意サ

「フム乙う山口を辨護する子矢張同病相憐れむのか

アハくく

高ひ男は中背の男の顔を尻眼にかけて口を鉗むで仕舞ツたので談話がすこし中絶れる、錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで参つた時中背の男の不圖立止つて

「ダガ君の免を喰たのは弔すべくまた賀をべしだぜ

何故

「何故と言つて君是れからは朝から晩まで情婦の側

にへばり付てゐる事が出来らア子、アハくく

「フ、ン馬鹿を言給ふな

ト高い男は顔に似氣なく微笑を含みさて失散の挨拶も手輕るく別れて獨り小川町の方へ參る。顔の微笑が一かわく消え往くにつれ足取も次第く緩かになつて終にハ蟲の這ふ様になり悄然と頭をうな垂れて二三町程も參つた頃不圖立止りて四邊を回顧はし駭然として二足三足立戻つてトある横町へ曲り込んで角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る、一所に這入つて見やう

高い男は玄關を通り抜けて椽側へ立出ると傍の坐鋪の障子がスラリ開いて年頃十八九の婦人の首チヨンボリとした摘ツ鼻と日の丸の紋を染抜いたムツクリ

とした頼どでその持主の身分が知れるといふ奴が又
ツト出る

「お歸なさいまし」

トいつて何故か口舐むりをする

「叔母さんは」

「先程お嬢さまと何處らへか」

「さう」

ト言捨て、高い男は椽側を傳つて参り突當りの段梯子を登つて二階へ上る。茲處は六疊の小坐舗一間の床に三尺の押入れ付三方は壁で唯南はなりが障子になつてゐる床に掛けた軸は隅々も既に蟲喰んで床花瓶

に投入れた二本三本の蝦夷菊はうら枯れて枯葉がち、
坐舖の一隅を顧みると古びた机が一脚据に付けてあ
ッて筆、ペン、楊枝などを挿しにした筆立一個に齒磨
の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある机の側
に押立たは二本立の書函是にへ小形の爛缶が載せて
ある机の下に差入れたは縁の缺けた火入是れには摺
附木の死體が横ッてゐる其外坐舖一杯に敷詰めた毛
團衣紋竹に釣るした袷衣柱の釘に懸けた手拭いづれ
を見ても皆年數物ろの證據には手擦れてゐて古色蒼
然たり、だが自ら秩然と取旁付てゐる
高い男は徐かに和服に着替に脱棄てた服を疊みかけ

て見て舌鼓を撃ちながら其儘押入へへと込んで仕舞ふ所へトバクサと上ツて來たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主横巾の廣い筋骨の逞しいズングリ、ムツクリとした生理學上の美人で、持ツて來た郵便を高き男の前に差置いて

「アノー先刻此郵便が

「アさう何處から來たんだ

ト郵便を手にとつて見て

「ウー國からか

「アノ子貴君今日のお嬢さまのお服飾はほんとに
目に懸け度やうでしたヨまづ子お下着が格子縞の

黄八丈でお上着はパツとした宜引縞の糸織でお髪
へ何時ものイボシリ捲きでしたがりお搔頭は此間
出雲屋からお取んなすつたあんな

と故意く手で形を拵らへて見せ

「薔薇の花搔頭で子それはくお美しう御座いまし
たヨ……私もあんな帶留が一ツ欲しいけれども……

と些し塞いで

「お嬢さまはお化粧なんぞはしないと仰しやるけれ
ども今日はなんでも内々で薄化粧なすつたに違ひ
ありませんヨ、だつてなんぼ色がお白ツてあんなに
……私も家にゐる時分は是れでもヘタクタ施けた

もんでしたがり此家へ上ッてからお正月ばかりに
して不斷は施けないの、施けてもいゝけれども御新
造さまの惡口が厭ですワだッて何時かもお客様の
おらッしやる前で鍋のお白粉を施けたどこは全然
炭團へ霜が降ッたやうで御座いますッて……餘り
ちやア有りませんか子貴君なんぼ私が不器量だ
ッて餘りちやアありませんか
ト敵手が傍にでもおるやうに眞黒になつてまうしか
ける高い男は先程より手紙を把ッてハ讀かけ讀かけ
てはまた下へ措きなどしてさも惑迷な體此時も唯「フ
ム」ど鼻を鳴らした而已で更に取合はぬゆるぎ生理學上